

盧文弨の理学観 — 乾嘉時代の漢宋兼採 —

若松 信爾

九州女子大学 共通教育機構
北九州市八幡西区自由ヶ丘一―一(〒八〇七―八五八六)
(二〇一五年五月二十九日受付、二〇一五年七月九日受理)

はじめに

乾嘉学術史の中で盧文弨(一七二七―一七九五)は、校勘学の専門家として偉大なる足跡を残した学者として広く認知されている。盧文弨の校勘した古籍は幅広く、経書のみならず諸子・文学書等に及び、その業績は後世の学者に多くの恩恵を施していることは言うまでもないであろう。またその交友関係も主に戴震・錢大昕・段玉裁・王念孫・紀昀等の人物がおり、一見すると考拠学派の系譜に属する人物と目されている。したがって現在までの盧文弨に対する多くの先行研究は校勘学の方面からのアプローチが主流となっている。盧文弨の人物像をそのように捉えるのは、決して違っているとはいえない。しかし、それはある人物をその功績を以て、その全人格を規定することになりたくないであろうか。

乾嘉時代の考拠学者と理学の関わりかたをみていくと、江藩の『国朝宋学淵源記』に「六經は服・鄭を尊び、百行は程・朱に法る」(1)と記され、理学との対立ではなく協調姿勢を示していた惠士奇が挙げられるが、吉田純氏は右の惠士奇の言辞について「程・朱が人倫道德として持つ普遍性を考えるならば『百行』は程・朱に法るといふのは、何も清朝に特殊なものではない」(2)として惠士奇の右のような姿勢

は当時の知識人の思考としては当然であるとし、別に漢宋兼採的学者として翁方綱の存在を指摘する。また他に『孟子字義疏証』等で理学批判展開した戴震のような学者もいれば、晩年に至り理学を重要視した段玉裁もいる。つまり、考拠学者の各人において様々な理学対する観念が存在していたと考えられ、単純に理学(宋学)と考拠学(漢学)の対立という図式に収まるものではないであろう。こうした中で盧文弨の姿勢は、その文集『抱經堂文集』等を見ていくと考拠学と理学の調和の立場を堅持していることが理解できる。要するに乾嘉時代は考拠学全盛期ではあったが、翁方綱のみならず、後の道光・咸豊期の学者のように漢宋兼採を考える考拠家も少なからずいたわけである。

そこで本稿ではこのような、漢宋兼採ともいふべき立場をとる盧文弨の理学観に重点を置き、それが如何なるものであったのか概観していく。

今回、本稿を草するにあたって、予めことわっておかなければならないことは、甚だ遺憾ではあるが、この問題に対して唯一の先行研究と考えられる、張波氏の中国人民大学二〇〇四年碩士學位論文『盧文弨程朱理学思想研究』を入手することがかなわず、未見に終わったことである。

一、家学としての理学

『抱經堂文集』に乾隆四十二年の作として「三峯盧氏家志序」という序文がある。そこには盧文弨自身が自らの先世を以下のように記している。

吾族の浙中に在る者は、東陽を以て最も著はると爲す。前明弘治朝の有名なる御史正夫先生は、理學を以て名あり。(3)

これによると盧氏の先祖で著名であったのは、明代弘治頃の理学者盧格、字は正夫であったことがわかる。盧格の伝は『明人小伝』等の書にあり、著書の『荷亭弁論』は『四庫全書総目』『子部雜家類存目』に解題がある。

また曾祖父・祖父については、段玉裁の「翰林侍読学士盧公墓誌銘」に「曾祖父承芳、明末建平の令にして、治績有り。祖父之翰、春柳堂詩有り」(4)とあり、曾祖父・祖父の学問には特に言及されていないが、曾祖父は科挙の關係から理学を修めたであろう。また祖父盧之翰は盧文弨の「先祖春柳堂詩抄小序」に「遂に舉子の業を廢して、耄ら詩を爲さんことを意ひ、繩削を假らずして自ら工なり」(5)とあることから、科挙受験することを廢し、詩人として名を成した。はつきりと理学を修めたと記録されるのは、父である盧存心である。

盧存心、字は敬甫、号は玉巖と称した。『清儒学案』巻四十六に短いながらもその伝がある。

盧存心、初名は琨、字は玉巖、仁和の人。恩貢生。父の之翰、少

くして孤、學に力め、喜んで詩を爲る。晩に馮景・王玉樞と詩社を結ぶ。景女を以て之に妻はす。業を餘山に受け、敬甫とともに道義を以て相切勵す。亦詩に雄なり。乾隆元年、博学鴻詞に擧げらるるも、報罷す。(6)

『清儒学案』の「字は玉巖」とするのは誤りで号が玉巖ある。ここに出てくる餘山・敬甫とは勞史と桑調元のことである。二人は当時有名な理学者であった。

勞史、字は麟書、餘姚の人である。勞史の人物と学風については『清史稿』等に伝がある。

勞史、字は麟書、餘姚の人。世々農を爲す。少くして傳に就き書を読む。長じて躬ら耕し父母を養ひ、夜は則ち披卷莊誦す。(中略) 繼いで朱子の近思録を読み、立起して香案を設け、北面稽首して曰く、「吾が師是に在り」と、常に自ら刻責す。謂へらく「天の我に命ずは、君の臣に詔げ、父の子に詔けるが若し、一たび職を廢せば、即ち嚴謹に膺り、一たび家業を墜さば、即ち窮まりて歸る所無し、慎まざるべけんや」と。其の學を論ずれば以て不妄語、不妄動に始まり、即ち諸を極めれば至誠にして息むこと無しと爲す。(7)

これを見ればいかにも厳格な理学者に感じるが、村人をよく教導し慕われたことが記されている。例えば何か村内で揉め事があれば「鬪争有れば、史に就きて質し、往々酒を置きて解を求む」(8)という具合に村の調停役のようなことまでしていたとある。

労史が没するに当たっては、少々奇妙な逸話がある。

門人桑元調錢塘より來り謁す、學を論ずること數日。將に別れんとして、之を送りて曰く、「吾が壽は三年を過ぎず、恐らくは復び相見ざるなり。行きて之に努めよ」と。後三年九月、門人汪鑒に謂ひて曰く、「今月を過ぎずして、吾將に去らんとす」と。遂に偏く親友の家に詣り、老者とは教へる所以を言ひ、少き者には學ぶ所以を言ふ。家人をして木を治め、後事を飭へしめ、晦の前の一夕、沐浴して衣を更へ、榻を正寢に移し、炳燭晏座すること平時の如し、旋て就寢す。明晨、之を撫でれば冰たし。調元其の遺書十卷を刻すことを爲す。(9)

これによると労史は三年前から自分の死を予告していたことになる。何らかの疾患を抱えていたのかもしれないが、この記述からはそのような様子は伺えないところから、真に不思議な死に方であった。後に遺稿は桑調元が出版している。

先述の『清儒学案』によれば、盧存心は労史より「業を餘山に受く」とあり、恰も門人の如く記されているが、それには疑問を抱かざるを得ない。その所以は『抱經堂文集』卷第十九所収の「荅朱秀才理齋書」という書簡に盧文弼が自分の父親についての、以下の記述が見えるが故である。

姚江の餘山先生は、性行誠篤にして、學ぶ所は一ら程・朱に本づく。布衣にして尺寸の勢い無きも、郷人望みて敬を生じ、其の徳を薰じて以て善良に爲らんことに勉める者比比たるなり。先師桑

跋甫先生、少年にして豪邁、不可一世なるも、獨り節を餘山に折り、著す所を以て、先の徵士敬甫府君に示す。府君其の後に署し、自ら私淑の弟子と稱す。(10)

要するに盧存心は桑調元を通じて其の著作に触れ、「私淑の弟子」とは自称したが、直接労史に入門したというわけではないということになる。同様の記事が柳詒徵の「盧抱經先生年譜」(以下年譜と略称する)にも「父存心、字は敬甫、巖玉と號す。名儒勞餘山に私淑し、言行苟もせず」(11)とある所から、労史直門ではなくあくまでも私淑の弟子であろう。

労史の門人であった桑元調は盧存心と友として善かつたことは前述した。「年譜」にも桑調元の「予生平兄事する友二人、一は盧敬甫、一は朱予齋」(12)また「予の兄事せるは人多きこと無し、惟敬甫のみ交わり最も篤し」(13)という発言が散見する。このような関係から、乾隆元年、盧文弼は歳二十にして、桑調元の門下に入っている。

桑調元の伝は『清史稿』・『清儒学案』にも載るが、『清史列伝』が最も詳細である。今『清史列伝』を以てその人となりをみることにする。

桑調元、字は伊佐、浙江錢塘の人、父は天顯、性は至孝、親病めば、膈羊脂に合せ、粥に和して以て進む。親死せば、鎗を抱きて哭す。人爲に抱鎗圖を繪く。元調少くして異才有り、筆を下せば千言、其の儕輩を屈す。年五十にして、業を史に受け、性理の學を聞くを得たり。性耿介、妄りに人に交わらず、尤も取與の辨を嚴にす。雍正四年、順天の鄉試に擧られ、十一年、會試の後、擧人の性理に明習せる者を遴選し、八人を得、調元焉に與かる。特旨

もて進士を賜ひ、工部主事を授けらる。父の憂ひに丁り、盧墓すること三年、服闋り官に補せらる。規約を釐正し、吏餽るに羨金を以てするも、卻て受けず。旋て疾を引きて歸る。嘗て九江濂溪書院に主たり、須友堂を構へ、史を祠り、以て淵源自ること有るを著す。又餘山書屋を東皋の別業に闢き、友四方の士に教ふ、一ら程・朱を以て法と爲す。晩に灤源書院に主たりて、益々師説を暢ぶ。著に論語説二卷有り、言ふ所皆集注の未だ盡さざるの義を闡き、頗る細密爲り。又躬行實踐録十五卷、敬を言ひ、仁を言ひ、一ら程・朱を宗とし、持論亦醇正を極む。其の時文縦横排算にして、自ら一家を成す。弢甫集八十四卷有り。乾隆三十六年、卒す、年七十七。(14)

これによると、気性は激しいながらも純粹であり、よく師の学を伝えたことが窺える。盧文詔も桑元調より多大な学問的影響を受けたことは想像に難くない。

二、読書と理学

吉田純氏の指摘する所では、「第三者の立場から、校勘学者として有名であった盧文詔の理学に対する観念を、早い時期に評価したのは翁方綱であろう」(15)とあり、『清儒學案』も「抱經學案」の前文において以下のように述べる。

抱經父師の教を奉じて、勞餘山再傳の弟子と爲り、後乃ち考訂校讐を以て名あり。其の學衆説を博采し、善を擇びて従ひ、往往に

して義理を折衷す。此れ其の漢學の幟を掲げて、宋儒を排擯する者と異なる。抱經學案を述ぶ。(16)

つまり、盧文詔の学問は校勘学で業績を挙げたが、理学との折衷を図るものであり、考拙学を以て理学を排斥するような学風でないことを示している。

では、右のような記述される盧文詔の学風が一体如何なるものであったのか、校勘学については多くの先学が詳論しているため、(17)ここでは理学を中心に見ていくことにする。『抱經堂文集』巻十に乾隆十四年作成の『与弟文詔書』という書簡があり、そこで盧文詔自身が自己の性格を次のように語っている。

吾少時の性情直慤にして、委曲に耐へず、又讀書多からず、益友も亦少なし、今に至るまで義理の精微を研求し、我の闕を補ひ、我の非を繩す能はず。誠に吾弟に望み無きこと能はず。吾意中の言はんと欲する所の者は、亦弟の爲に盡さざるべからざるなり。(18)

書簡の初段ともいうべき部分にこのような表現がある。これは謙遜の言辞ではあるが、盧文詔が理学に対して自己修養の学と捉えている部分が窺える。更に書簡は盧家の先祖のことに言及した後、自己の幼い頃を回顧する。

吾の生まれし時は、正に家中匱乏の際に値る。四・五歳の時、祖父母親ら之を撫養す、稍く長じて、猥賤の事に於いて爲さざる所無

し。嘗て糴ひて官米を得、吾晩に學堂より歸り恒に自ら春くなり。
(19)

この文言から、盧文弼の家が大変貧しかったことがわかる。盧文弼が校勘学に対して興味を持つに至った経緯も貧なるが故にその下地が培われたようである。

吾時に書を讀むも、門徑のよりて入る所を知らず、鈔書を好むも、亦世間希見の本に非ず。徒らに日力を此に費やして、其の當に務むべき所に務むるを知らざるなり。(20)

「年譜」には盧文弼が本格的に校勘学に志したのは雍正十年、十六歳のこととし、張波氏の「柳詒徵盧抱經先生年譜補遺」(以下年譜補遺と略す)では、雍正九年のこととする。(21) このような微細な誤差があるのは、これは両書の引く所の資料の「書楊武屏先生雜諍後」に以下の文言があるためである。

余年十五・六、人より書を借りて讀みて、即ち之を鈔す。久しくして、諸書の文字の謬誤多きを患へ、頗る校勘に志す有り。(22)

これ以降、盧文弼にとって校勘学は生涯をかけての仕事となったことは本稿で贅言するまでも無いであらう。

『抱經堂文集』には盧文弼の膨大な量の読書と校勘作業の過程で記された、序跋類と書簡等が収録されている。次にこれらの中から主だった理学や朱子に言及された部分を見ていくことにしたい。先ず序跋類

の文を挙げる。

①乾隆十四年、「書学部通弁後」

此の書朱・陸の學の異なるを別ち、較然明白にして、學者之を熟觀して、曲説の誤る所と爲らざることを庶ふ。(中略) 此の書出てより、二家の學は必ず強いて同じくすべらざるを知る。陸氏の學は實に禪より出で、蓋し其の身を終へるまで變はらざるなり。而して朱子の學は則ち屢々變はりて始めて定まる。故に始めは同じにして終りは異なること有るも、絶へて始め異なり終り同じなること無し。其の援據詳確、底蘊を爬抉するを觀れば、陸氏の禪爲るや信に然り。吾夫れ人の惑へるは、固に不可解なる者有るを怪む。近時の人又陸子學譜及び朱子晚年全論・朱子不惑録等の書を爲す有り、復び程・王之唾餘を襲ひて少しく其の説を變じ、以て朱子の晩年は其の學は陸氏と合するも、其の論は陸氏と異なると爲すに過ぎず。此の語更に齷齪として辨ずるに足らざるも、顧反して此の書を痛誅す。無知の人の道聽塗説、是れ誠に何の心ぞや。
(23)

明の陳建が『学部通弁』により朱子・陸象山の學が相違するものであることを、明瞭にしたにもかかわらず、清の李紱が『朱子晚年全論・朱子不惑録』等で、朱・陸の學が同様であるとすることを非難している。

②乾隆二十五年「書楊武屏先生雜諍後」

人の學を爲すや、其の徑途各々よりて入る所有り。理學を爲す者は、程・朱を宗とし、經學を爲す者は、賈・孔を師とし、博綜の學を爲す者は、貴與・伯厚に踪けんと希ひ、詞章の學を爲す者は、子雲・相如を方軌とし、鈔撮の學を爲す者は、則ち初學記・藝文類聚の諸編を漁獵し、校勘の學を爲す者は、則ち刊誤・考異の諸作を規樞とす。人の力は固より能はざる所有り、兼・抑も亦性情に關し、其の近きより審らかにして従事す。將に終身之を以てせんとし、而る後以て名を發し業を成すべし。其の能く兼ねる所の者有るは、尤も貴ぶに足るなり。(24)

この文章からは盧文詔の学問感が窺えて非常に興味深い。先ず盧文詔は学問のカテゴリーを理学・經学・博綜・詞章・鈔撮・校勘の六種類に分類する。ここで言う經学は漢学あるいは考拠学を意味し、博綜の学は馬端臨・王応麟のような学問を指し、鈔撮の学とは類書中から摘録するような学問のことを指すようである。人は向き不向きがあるため、自分の好むところの学を修めることになるわけであるが、多くの学問を兼採することが尤も尊いことであるとしている点にその特徴がある。

③ 乾隆三十二年「中庸図說序」

文詔弱冠にして經を桑汝甫先生の門に執り、先生の中庸の大義を説くを聞き、支分節解、綱擧目張にして、中間の脈絡通貫融洽せざるは無し。先生は固に以て朱子より得る所の者を爲すこと是の如し。(中略) 文詔も亦幸ひに緒餘を竊聞するを得たり。試を賣

慶に按ずる日の於いて、諸生例に循ひ書を講ず。君子中庸の一章を以て進講する者有り、吾の素より吾師より聞く所の者と未だ合せざるなり。因りて吾師の説を擧げて以て諸生の爲に正告す。既に著す所の中庸圖說を以て來り質す者有り、新化の生員劉光南なり。其の解する所平易切實にして、吾舊に聞く所と合すること多く、又朱子の相當相對の語に本づき、以て之に圖を爲す。(中略) 入試に及び劉生は又其の曹に冠たり、其の文能く理を以て勝り、矜才使氣以て見長を求める者と迥異し、益々其の儒先の旨の深きを得ること有りと信ずるなり。吾房師漢陽の孫楚池漢先生、嘗て書を寓し文詔に宜く理學を昌明し、華に務めて實を棄てること母かるべしと教ふ。顧れば至る所殊なり、得易からず、既に劉生を得たり、亟かに擧げて以て告ぐ。(25)

盧文詔は「年譜」・「年譜補遺」によると、乾隆三十一年湖南学政に任じられている。おそらく宝慶県における歳試あるいは科試で、劉光南とその著書『中庸図說』に関心を示し、またその試験(おそらくこの試験は科試であろうと考えられる)でも劉光南が一位であったことを述べていると考えられる。孫楚池については「年譜」は未詳とし、乾隆十七年の項に盧文詔が進士となったときの同考官ではないかとして名前をその乾隆十七年の項に記している(26) 房師とあることからそう考えるのが妥当であろう。興味深いことは孫楚池が盧文詔に理学の隆盛ならんことを訴え、学政である盧文詔はその期待に応えるべく務めていることである。この科挙と理学に関しては盧文詔の理学観を理解する上で重要な問題となる。この点については後述する。なお孫楚池については『抱經堂文集』に「寄孫楚池師書」という書簡が収め

られている。

④乾隆四十年「荷亭弁論跋」

往時章楓山の東陽の盧正夫に與ふるの書を見るに、其の著論の失を議し、私に亦其の意を用ふるに過當、或いは未だ純ならざるに有るを疑ふ。近ごろ乃ち荷亭辨論を得て之を觀て、始めて其の覃精研思、實に灼見有り、唯理の至是なる者のみ歸と爲すを知る。古人に徇ふを輕んぜざるは、此れ乃ち其の深く古人を信ずる所以なり。百年前、蕭山の毛氏論を立て務めて朱子に駁を與へ、戟手裂眦して相向かふに幾し。其の言ふ所の非を微論するや、即ち其の氣象は、已に迥に儒者と侔ならず。前輩山陰の沈徵君冰壺清玉尚ほ其の餘風に沿ふ、余嘗て微かに之を諫む。徵君大笑して起つ。朱子の聖人に視へること、當に同じからざるべきも、其の言一の議すべき無しと謂ふは、是れ其の思ふ所無き者なり。一二の未だ安からざるに因りて、遂に并て其の餘を疑ふは、夫れ豈に可ならんや。此の書經を論じて、兼ねて古今の事績に及ぶ、往々にして創獲多し、之を讀めば、犁然として當ること有り。問々朱子と異なる者有るも、夫れ好みて異を爲すに非るなり（中略）且つ恐らくは世人朱を尊ぶこと太甚し、一たび異同有るを聞かば、便ち以て必ず採る可き無しと爲さば、則ち深く作者の意を昧くす。（27）

この文を要約すれば、盧文弼は明の章懋が盧格に与えた書簡を読み、章懋が盧格の著作を批判していることについて疑問を感じていた。しかし『荷亭弁論』を読みその内容は「理の至是」を追求するものであり、

毛奇齡の如くことさら朱子に反対するものではない。この書は朱子と相違する部分があるが、好んでそうしたわけではないのである。世間の人々は朱子を尊崇するあまり、少しでも朱子と相違すると、必要のない書とするが、これでは作者の著述の意図がわからなくなってしまう。というものである。

しかし『四庫提要総目』『子部雜家類存目』における『荷亭弁論』については「大抵の持論は詭異にして、朱子の説を攻撃すること、往々にして過當なり」（28）とあり、この書についての評価は高いとはいえない。盧文弼の先述の「好みて異を爲すに非るなり」という言辭は何か弁護するような様子に見える。やはり盧格が盧氏の先祖に当たるために、このような記述になつたのであろうか。

紙幅の都合上以上の四例を列挙するにとどめるが、当然概ね理学に對しての認識は肯定的であり、③の文の如く学政として科挙に臨む時などは、積極的に理学に造詣が深い者を採用することに務めている。これは盧文弼が理学という学問に對して人格陶冶のみならず、政治上でも重要な学問であるという認識であつたこと如実に示している。つまり②における文で学問を分類し、「理学」・「經学」としたように、盧文弼の理学観は理学に道德・実践の学という認識が濃厚であり、分類の先頭に「理学」を配置したことは、ある意味「經学」（考拠学）より重視されるべきものと考えていた可能性がある。

三、書簡に見える理学観

前章では主として序跋類からの理学観を見てきたが、本章では書簡から此の問題を窺ってみた。盧文弼の理学観がよく表れた書簡としては、乾隆四十二年の「荅彭允初書」が挙げられる。彭紹升（一七四〇

（一七九六）字は允初、号は尺木居士、江蘇長州の人。在家仏教者として名を知られている。彭紹升は乾隆二十二年の会試及第で房師が盧文弼であった。

書簡の主な内容は乾隆四十一年、彭紹升の著書である『二林居制義』を贈ってきたことに対する回答である。

乃ち去年寄來せし二林居制義の一冊、卷を開きて自序を見るに、即ち大ひに意に慍わざる者あり。夫れ年兄の禪學に深きは、夫れ人にして之を知り、即ち己も亦自ら諱まざるなり。僕相識より以來、今に至るまで已に二十餘年、交情益々熟すも未だ嘗て年兄と禪を論ぜず、亦未だ嘗て年兄の禪を爲すを尠せず。誠に造化の奧、鬼神の祕を以て、未だ研究洞徹する能はずして、彼の家の言に於いても又素より未だ嘗て參討せず、夫れ人の質性は固より各々其の適する所に適し、自ら反する能はざる者有り。古來禪學中の忠臣爲るも、孝子爲る者復何ぞ限らん、必ずしも概行抹殺せざるなり。吾但年兄の恬潔直諒を取るのみ。（29）

先ず盧文弼は贈られてきた『二林居制義』の自序を見て、大いに不満である旨を開陳する。そして二十年以上に及ぶ彭紹升との交流において、彭紹升が禪學に造詣が深いことは知っていたが、そのことについては今まで論じたり、批判してこなかったといひ、これまでの交友はひとえに彭紹升の人柄が清らかで正直であったためであるといひ、以下盧文弼は不満の原因ともいふべき問題を指摘する。

今時文を以て孔子・孟子の言を詮かにし、序に乃ち夢中の二境

に託して以て旨趣を標明するも、固より己に褻越にして尊からず。乃ち一は則ち「夢に老師と爲り舉比を擁し、義・文・周・孔の教へを闡かにし、圓らせて聽者百千人にして、之を樂しむのみ」と。又「夢に衲子と爲り、空山跣座し、六根蕭寂、五蘊廓然ならば、則ち之を樂む」と。何ぞ年兄此の之に中りて紛として静ならざるや。夫れ夢に因を成し、年兄自賢の見有り、而して以爲へらく百千人皆己に若くは莫きなりと、是を以て夢の中に此の一境有るなり。衲子の若きは、殆ど夙根と云ふ所の者に似たり、今は但未だ祝髮せざるのみ。斯れをして金剛を詮にし、楞嚴を釋せしむるなるは、吾又何ぞ責めん。乃ち今以て四書の義の編に冠するは、豈に其れ倫ならんや。儒を援きて墨に入るすら且つ不可なり、況や大聖大賢を抑へて之をして皆西方氏の教へより出づとせしむれば、則ち罪を名教に得ること甚だ大なり。（30）

盧文弼は『二林居制義』の序文にある二境、即ち「夢中に老師と爲り云々」と「夢に衲子と爲り云々」について反駁する。前者は彭紹升の自らを賢とする傲慢な考えを表明するものとし、後者は「衲子」として『金剛經』・『楞嚴經』を説くのであれば、なんら問題はないが、釈氏の義を以て儒學の四書を説くような真似は名教の罪人となるであろうと、厳しく批判している。次に盧文弼はこの書の内容に、言及する。理学に関する部分は次のごとくである。

今年兄の云ふ所の小儒、云ふ所の臆説とは何人ぞや。是明明として朱子を指すのみ。朱子は大儒にして、古今の駁難一ならざるも、其れ朱子に於いては無傷なり。而れども年兄乃ち筆を肆に臆を逞

しくして、安んずる所を顧ざること此の如し。即ち先輩を以て論ずるも、意見各々殊る。尚ほ當に其の辭を婉約にすべし、寧ぞ朱子を謂ひて横に駁ること斯の若きや。首編此の如し、是を以て未だ徧く觀るに及ばず。蓋し他作の理に合ふ者有りと雖も、亦此の經を離れ道に畔くを救ふ無し。年兄の書を得るに及び、自ら數題を擧げ、朴實にして理を説き、正に洙泗の傳、程・朱の奥を發明すと謂ふ。僕因りて取りて覆閱す。自古皆有死編の後に自ら記して「惟だ此の一事實のみ、餘の二は即ち真に非らず」と云ふが如きは、案するに此の二語は本法華經に出づ、事は本法の字に作る。

(31)

彭紹升が著作中等において朱子に対し「小儒」・「臆説」等の語彙を用いて批判したことについて、盧文弨は猛反発する。首編からこのような論調であれば、全編見るに及ばないとし、その内容の「經を離れ道に畔く」ことは救いようがないという。また語彙に『法華經』等の仏典から採ったものがあることを指摘する。結果盧文弨は彭紹升に対して次のように忠告する。

今年兄の爲に計れば、其の大きい理を害する者を選び、亟かに之を火くに若くは莫し。(32)

つまり、理学に対して有害なる部分を焚棄することを勧めているのである。これを見ると盧文弨が徹底した理学擁護の立場をとっていたことが理解できる。

彭紹升はこの『二林居制義』を戴震（一七二三～一七七七）にも贈

呈している。それに対する戴震の返書が有名な「答彭進士書」である。

足下の主とする所の者は、老・莊・佛・陸・王の道なり。而れども稱引する所は、盡く六經・孔孟・程朱の言なり。誠に其の實を愛さんか、則ち其の實此より遠し。如し誤るに老・莊・佛・陸・王の實を以て、其の實と爲さば、則ち彼の言、親切著明にして、而も此は遷就傳合を費やす。何ぞ示すに親切著明なる者を以てせざらんや。(33)

戴震は彭紹升の思想の中核が老莊・仏教・陸王学にあるにもかかわらず、引用されている言葉が全て、六經・孔孟・程朱の言辭であることに疑問を感じ、老莊・仏教・陸王の学を、孔・孟、程・朱の学同様であると誤解しているのではないかと述べる。更に見ていくと次のように記す。

愛する所の者は、釋氏の實なり、其の實を愛して其の名を棄て、其の名を借りて陰に其の實を易へるは、皆誠に於いて虧くる有り。(34)

実際に彭紹升の好んだ思想は仏教であり、戴震は自身は仏教なのに名称を理学に借りるのは、誠実に欠けていると非難している。これらの部分を見れば、戴震も盧文弨同様この著作に関しては否定的であったことがわかる。しかし、周知の如く戴震は反理学的立場の学者である。

然れども僕の私心、足下に期望するは、猶ほ此に在らず。程・朱

の理を以て物有るが如く、天より得て心に具わると爲し、天下後世の人々の、己に在るの意見に憑りて、之を執りて理と曰ふを啓きて、以て斯の民に禍し、更に淆るに無欲の説を以てして、理を得るに於いて益々遠く、其の意見を執るに於いて益々堅く、而して斯の民に禍すること益々烈し。豈に理の斯の民に禍するならんや。(35)

今後、彭紹升に期待する所を述べんとして、戴震は理学批判を展開していく。当然のことながら戴震は盧文詔とはまったく立場を異にしているのである。

では盧文詔は『孟子字義疏証』に代表される戴震の独自の思想を、どのように評価していたのであろうか。B・A・エルマン氏はこの点について、盧文詔と錢大昕が発表した戴震の伝記にふれて、当時の考掇家達が戴震の哲学的著作に関心を示してはいなかったと述べている(36)。つまり、この当時においては『孟子字義疏証』は評価されるべき著作ではなかったのである。

次に乾隆四十四年の書簡「荅朱秀才理齋縮書」を見てみる。朱縮号は理齋という外は、その人物の詳細はわからない。ただ書簡中に「足下の印する所の餘山遺書」とある所から労史の門下生か、その関係者であろう。

來書を読み義を陳ぶること甚だ高し、夫れ雜學は經學に如かず、而して窮經の道は又理を研めるに在り。理は何を以て明らかにするや。要するに身體に在りて之を力行し、時時省察し、處處體驗すれば、即ち米鹽の瑣、寢席の藝、何くに在りや道に非ざること、

即ち何に在りや學に非ざること。正に講説論議の功と爲すに沾沾とするを待たざるなり。(37)

右は書簡の冒頭部分である。盧文詔は「窮經」とは「理を研めるに在り」と断言する。更に「理」を明らかにする方途は、「時時省察」・「処処體驗」等とあることから、所謂朱子の言う「窮理格物」と同様であろう。ここでは通常いわれている校勘学者としての盧文詔ではなく、完全に理学者としての盧文詔の相貌が浮かび上がってくるのである。

この年は朱縮に宛てて先の「荅朱秀才理齋縮書」と「与理齋書」・「再荅理再書」の合計三通の書簡を製作している。二・三目の「与理齋書」をみると先述した盧文詔の科挙と理学に関する問題を顕著に示す部分がある。

曩の丁丑、禮闈に分校し、山左の一巻を得、其の人必ず正氣ならんと決し、薦むるも後主者の許可を爲さず、將に勝を開くを次めんとし、猶其の巻を抱き堂に上り力争するも、竟に得る能はず。近ごろ數科の中に、未だ曾て此の事有らず。此れに因り通國傳聞し、且つ僕之れが爲に墮涙せし者と謂ふ。後に其の人來りて見るに、乃ち昌樂の閻君名は循觀、果たして道學の君子なり。再進再黜すれば、即ち僕も亦其の姑く少しく文格を變じ俗に諧ふことを勸む。而して此れ君瞿然として容を正し、以て對ふる能はず。丙戌に至り、始めて識者に賞せられ、之を高列に置く、官を得て考功主事たり、三年にして歸るを告げ、里中に卒す。(38)

乾隆二十二年の会試において盧文詔は閻循觀の答案を合格として推

薦したが、結局、主査の認める所とならず、不合格となってしまった。盧文弼は閩の合格について最後までがんばったが、不合格を覆すには至らなかった。当時の科挙でこのような論争になることは希であったとみえ、この話は全国的に伝わったようである。此の話のためであろう、試験後に閩循観は盧文弼と面晤している。この時盧文弼は試験の時の文体を少々変えるように忠告している。また盧文弼の「閩考功懷庭哀辭」においてもこの会見の時とその後のことを次のようにいう。

君は試の前に余の爲る所の亡室桑孺人行略を得て之を讀み、惻惻然として中に動くこと有るが若しと言ひ、能く之を質言して情事も亦曲盡せりと謂ふなり。君余の文を好み、余君の文を好む、其の相合するも亦自ら偶然ならざる者有り。自後試屢々利あらざるも、君其の道を守り自若たり。三十一年の會試に至り、余又分校の列に與る。揭榜の日、唱名第九に至る。(39)

つまり、お互いに一見して肝胆相照らす仲になったことが窺える。その後閩循観は乾隆三十一年に進士となっている。

何故盧文弼が力争してまで閩循観の合否こだわったのか、これは先述した劉光南の件と同様、閩循観が理学に優れていたからにはかならない。それは「与理齋書」の文に「果たして道学の君子なり」とある文言がそれをよく表している。盧文弼は学政・分校という視点に立つた時、なによりも理学を重視し、理学に優れた人材を確保することに努めているのである。

おわりに

以上、『抱經堂文集』の中から盧文弼の理学に関する部分を概観してきた。そこから見えてくるものは、理学に対する積極的肯定である。盧文弼のこのような言辭を理解するためには、先に引用した「書楊武屏先生雜諍後」中の「人の學を爲すや、其の徑途各々よりて入る所有り」という言説、更に、学問を六種類に分類した上で、「其の能く兼ねる所の者有るは、尤も貴ぶに足るなり」と述べるこの部分が、盧文弼の学問に対する観念の特色を極めて表出している箇所と考えられるのではないだろうか。つまり盧文弼にとつては学問の兼採こそ尊ぶべきものであった。要するに理学と考拠学は対立するべきものではなく、むしろ並存すべきものだという考えであった。当時の思想界は理学と考拠学が対立し、相争うというような図式で説明されることが多い。確かに乾嘉の學術といえ、考拠学全盛期であったことは否定できない事実であり、また戴震らのように反理学の旗幟を鮮明にしている学者もいた。しかし、多くは朱子やその他の理学者の文献の取り扱ひの誤謬には批判的であるものの、科挙や理学が体制教学である関係上、全面的に理学そのものを否定しているわけではなかつたといえるのではないだろうか。

盧文弼の場合は既述してきたように、理学と考拠学・校勘学は扞格するものではないとして並存させた。そしてこれらの学問に対して、積極的に取り組んでいるのである。特に理学に関しては、これまで述べてきたように、科挙の試験官の立場から理学者を採用することを主張してはばからなかつた。つまり、一種の経世致用の学として、政治上有効であるという観点から、盧文弼は理学に全幅の信頼をおいているのである。これらのことから考えると、もし盧文弼の思想の中で公

私の区分があつたとするならば、理学は主に公的な部分を占める学問であつたといえるのではないだろうか。

注

- (1) 江藩 「国朝宋学淵源記」『国朝漢学師承記』所収 中華書局 一九八三年 一五四頁
- (2) 吉田純 『清朝考証学の群像』創文社 二〇〇六年 一一四頁
- (3) 盧文弼 『抱經堂文集』中華書局 一九九〇年 五二頁 「吾族之在浙中者、以東陽爲最著。前明弘治朝有名御史正夫先生格者、以理學名」
- (4) 前掲書 一頁 「曾祖父承芳、明末建平令、有治績。祖父之翰、有春柳堂詩」
- (5) 前掲書 六九頁 「遂廢學子業、壹意爲詩、不假繩削而自工」
- (6) 徐世昌等 『清儒学案』卷二 中華書局 二〇〇八年 一八七七頁 「盧存心、初名琨、字玉巖、仁和人。恩貢生。父之翰、少孤力學、喜爲詩、晚與馮景・王玉樞結詩社。景以夫妻之、受業於餘山、與弢甫以道義相切劘、亦雄於詩。乾隆元年、舉博學鴻詞、報罷」
- (7) 『清史稿』卷四百八十 中華書局 二〇〇三年 一三二四八頁 「勞史、字麟書、餘姚人。世爲農。少就傳讀書、長躬耕養父母、夜則被卷莊誦。(中略) 繼讀朱子近思錄、立起設香案、北面稽首曰、吾師在是矣。常自刻責、謂天之命我者、若君之詔臣、父之詔子。一廢職、即膺嚴譴、一墜家業、即窮無所歸、可不慎哉。其論學以爲始於不妄語、不妄動、即極諸至誠無息」
- (8) 前掲書 一三一四八頁 「有關爭、就史實、往々置酒求解」
- (9) 前掲書 一三二四八頁 「門人桑元調自錢塘來謁、論學數日。將別、送之曰、吾壽不過三年、恐復不相見。行矣努之。後三年九月、謂門人汪鑿曰、不過今月、吾將去矣。遂徧詣親友家、與老者言所以教、少者言所以學。令家人治木飭後事、晦前一夕、沐浴更衣、移榻正寢、炳燭晏座如平時、旋就寢。明晨、撫之冰矣。調元爲刻其遺書十卷」
- (10) 盧文弼 前掲書 二七〇頁 「姚江餘山先生、性行誠篤、所學一本程・朱。布衣無尺寸之勢、而鄉人望而生敬、薰其德以勉爲善良者比比也。先師桑弢甫先生、少年豪邁、不可一世、而獨折節於餘山、以所著示先徵士敬甫府君。府君署其後自稱私淑弟子」
- (11) 柳詒徵 「盧抱經先生年譜」『中央大学国学図書館年刊』所収 一九二八年 二二三頁
- (12) 前掲書 二三頁
- (13) 前掲書 二三頁
- (14) 王鐘翰点校 『清史列伝』卷六七 中華書局 一九八七年 五三三五頁 「桑調元、字伊佐、浙江錢塘人、父天顯、性至孝、親病、膈合羊脂、和粥以進。親死、抱鑕而哭。人爲繪抱鑕圖。元調少有異才、下筆千言、屈其儔輩。年十五、受業於史、得聞性理之學。性耿介、不妄交人、尤嚴取與之辨。雍正四年、舉順天鄉試、十一年、會試後、遴選舉人之明習性理者、得八人、調元與焉。特旨賜進士、授工部主事。丁父憂、盧墓三年、服闋補官。釐正規約、吏餽以羨金、卻不受。旋引疾歸。嘗主九江濂溪書院、構須友堂、祠史、以著淵源有自。又闢餘山書屋於東臯別業、友教四方之士、一以程、朱以爲法。晚主灤源書院、益暢師說。著有論語說二卷、所言皆闡集注未盡義、頗爲細密。又躬行實踐錄十五卷、言敬、言仁、一宗程・朱、持論亦極醇正。其時文縱橫排異、自成一派。有弢甫集八十四卷。乾隆三十六年、卒、年七十七」

- (15) 吉田純 前掲書 一一四頁
- (16) 徐世昌等 前掲書 卷三 二七五九頁 「抱經奉父師之教、爲勞餘山再傳之弟子、後乃以考訂校讐名。其學博采衆說、擇善而從、往往折衷於義理。此其異於揭漢學之幟以與排擯宋儒者。述抱經學案」
- (17) 盧文弨の校勘学についての論文は多数ある。代表的なものを挙げると、歐陽炯「盧文弨生平著述及校讐書目考略」『東京大学中国文学系系刊』所収 第一期 一九七五年、許殿才「盧文弨校勘学述」『史学史研究』第三期所収 一九八八年、許殿才「盧文弨校勘学的歴史地位」『社会科学学報』第一期 一九九〇年、等がある。
- (18) 盧文弨 前掲書 三〇〇頁 「吾少時性情直慤、不耐委曲、又讀書不多、益友亦少、至今不能研求義理之精微、補我之闕、繩我之非。誠不能無望於吾弟。吾意中所欲言者、亦不可不爲弟盡也」
- (19) 盧文弨 前掲書 三〇二頁 「吾生時正值家中匱乏之際。四・五歲時、祖父母親撫養之。稍長、於猥賤之事無所不爲。嘗糴得官米、吾晚從學堂歸、恒自舂也」
- (20) 盧文弨 前掲書 三〇二頁 「吾時讀書、不知門徑所從入、好鈔書、亦非世間希見之本。徒費日力於此、而不知務乎其所當務也」
- (21) 張波 「柳詒徵盧抱經先生年譜補遺」『中華文明史綱』一 二九所収 二〇〇七年 二頁
- (22) 盧文弨 前掲書 一六〇頁 「余年十五・六、從人借書讀、即鈔之。久之、患諸書文字多謬誤、頗有志於校勘」
- (23) 盧文弨 前掲書 一四四頁 「此書別朱・陸之學之異、較然明白、學者熟觀之、庶不爲曲說所誤。(中略) 自此書出、知二家之學必不可強同。陸氏之學實出於禪、蓋終其身弗變。而朱子之學則屢變而始定。故有始同終異、絕無始異終同。觀其援據詳確、爬抉底蘊、陸氏之爲禪也信然。
- 吾怪夫人之惑、固有不可解者。近時人又有爲陸子學譜及朱子晚年全論・朱子不惑錄等書、不過復襲程王之唾餘而少變其說、以爲朱子晚年其學與陸氏合、其論與陸氏異。此語更齷齪不足辨、顧反痛詆此書。無知之人道聽塗說、是誠何心哉」。
- (24) 盧文弨 前掲書 一六〇頁 「人之爲學也、其徑途各有所從入。爲理學者、宗程・朱、爲經學者、師賈・孔、爲博綜之學者、希踪貴與・伯厚、爲詞章之學者、方軌子雲・相如、爲鈔撮之學者、則漁獵乎初學記・藝文類聚諸編、爲校勘之學者、則規撫乎刊誤・考異諸作。人之力固有所不能、兼抑亦關乎性情、審其近而從事焉。將終身以之、而後可以發名成業。其能有所兼者、尤足貴也」
- (25) 盧文弨 前掲書 二十頁 「文弨弱冠執經於桑叟甫先生之門、聞先生說中庸大義、支分節解、綱舉目張、而中間脈絡無不通貫融洽。先生固以爲所得於朱子者如是。(中略) 文弨亦幸得竊聞緒餘。於試按賈慶曰、諸生循例講書。有以君子中庸一章進講者、與吾素所聞於吾師者未有合也。因舉吾師之說以爲諸生正告焉。既有以所著中庸圖說以來質者、則新化生員劉光南也。其所解平易切實、多與吾舊所聞合、而又本朱子相當相對之語、以爲之圖。(中略) 及入試、劉生又冠其曹、其文能以理勝、迥異乎矜才使氣以求見長者、益信其有得於儒先之旨深也。吾房師漢陽孫楚池漢先生、嘗寓書教文弨宜昌明理學、毋務華而棄實。顧所至殊不易得、既得劉生、亟學以告」
- (26) 柳詒徵 前掲論文 三五頁
- (27) 盧文弨 前掲書 一四三頁 「往時見章楓山與東陽盧正夫書、議其著論之失、私亦疑其用意過當、或有未純。近乃得荷亭辨論觀之、始知其覃精研思、實有灼見、唯理之至是者爲歸。不輕徇古人、此乃其所以深信古人。百年前、蕭山毛氏立論務與朱子駁、幾於戟手裂眦相向。

微論其所言非也、即其氣象、已迥與儒者不侔矣。前輩山陰沈徵君冰壺清玉尚沿其餘風、余嘗微諫之。徵君大笑而起。朱子之視聖人、固當不同、謂其言一無可議、是無所用其思者也。因一二未安而遂并疑其餘、夫豈可哉。此書論經而兼及古今之事績、往々多創獲、讀之犁然有當焉。間有與朱子異者、夫非好爲異(中略)且恐世人尊朱太甚、一聞有異同、便以爲必無可採、則深昧作者之意矣」

(28) 永瑤等撰 『四庫全書總目』 中華書局 一九九五年 一〇九五頁
「大抵持論詭異、攻擊朱子之說、往往過當」

(29) 盧文弨 前掲書 二六一頁 「乃去年寄來二林居制義一冊、開卷見自序、即有大不愜意者。夫年兄之深於禪學、夫人而知之、即己亦不自諱也。僕自相識以來、至今已二十餘年、交情益熟而未嘗與年兄論禪、亦未嘗砭年兄之爲禪。誠以造化之奧、鬼神之祕、未能研究洞徹、於彼家之言又素未嘗參討、夫人之質性固有各適其所適而不能自反者。古來禪學中之爲忠臣、爲孝子者復何限、不必概行抹殺也。吾但取年兄恬潔直諒而已」

(30) 盧文弨 前掲書 二六一頁 「今者以時文詮孔子・孟子之言、而序乃託於夢中之二境以標明旨趣、固已褻越而不尊矣。乃一則夢爲老師擁皋比、闡義・文・周・孔之教、圓而聽者百千人、而樂之已。又夢爲衲子、空山跌座、六根蕭寂、五蘊廓然、則樂之。何年兄此中之紛而不靜也。夫夢成於因、年兄有自賢之見、而以爲百千人皆莫己若也、是以夢之中有此一境也。若衲子、殆似所云夙根者、今但未祝髮耳。使於斯而詮金剛、釋楞嚴也者、吾又何責。乃今以冠四書義之編、豈其倫哉。援儒而入於墨且不可、況抑大聖大賢而使之皆出於西方氏之教、則得罪於名教甚大」

(31) 盧文弨 前掲書 二六二頁 「今年兄所云小儒、所云臆說何人乎。是明明指朱子而已矣。朱子大儒、古今駁難不一、其於朱子無傷也。而年兄乃肆筆逞臆、不顧所安如此。即以前輩而論、意見各殊。尚當婉約

其辭、寧謂朱子而可橫詈若斯也。首編如此、是以未及偏觀。蓋雖有他作之合理者、而亦無救於此之離經而畔道救矣。及得年兄書、自舉數題、謂朴實說理、正發明洙泗之傳、程・朱之奧。僕因取而覆閱。如自古皆有死編後自記云、惟此一事實、餘二即非真、案此二語本出法華經、事本作法字」

(32) 盧文弨 前掲書 二六三頁 「今爲年兄計、莫若擇其大害理者亟火之」

(33) 戴震 『戴震全書』 卷六 黃山書社 二〇一〇年 三五九頁 「足下所主者、老・莊・佛・陸・王之道。而所稱引、盡六經・孔孟・程朱之言。誠愛其實乎、則其實遠於此。如誤以老・莊・佛・陸・王之實爲其實、則彼之言、親切著明、而此費遷就傳合、何不示以親切著明者也」

(34) 戴震 前掲書 三六〇頁 「所愛者、釋氏之實也、愛其實而棄其名、借其名而陰易其實、皆於誠有虧」

(35) 戴震 前掲書 三六〇頁 「然僕之私心、期望於足下、猶不在此。程・朱以理爲如有物焉、得於天而具於心、啓天下後世人々憑在己之意見而執之曰理、以禍斯民、更淆以無欲之說、於得理益遠、於執其意見益堅、而禍斯民益烈。豈理禍斯民哉」

(36) B・A・エルマン 『哲学から文献学へ』 (原題 From Philosophy to Philology) 馬淵昌也・林文孝・本間次彦・吉田純訳 知泉書院 二〇一四年 二〇頁

(37) 盧文弨 前掲書 二七〇頁 「讀來書陳義甚高、夫雜學不如經學、而窮經之道又在於研理。理何以明。要在身體而力行之、時時省察、處處體驗、即米鹽之瑣、寢席之褻、何在非道、即何在非學。正不待沾沾於講說論議爲功也」

(38) 盧文弨 前掲書 二七二頁 「曩丁丑文校禮闈、得山左一卷、決

其人必正氣、薦後不爲主者許可、將次開榜、猶抱其卷上堂力爭、竟不能得。近數科中、未曾有此事。因此通國傳聞、且謂僕爲之墮淚者。後其人來見、乃昌樂閻君名循觀、果道學君子也。再進再黜、即僕亦勸其姑少變文格諧俗。而此君瞿然正容、以不能對。至丙戌、始見賞於識者、置之高列、得官考功主事、三年告歸、卒於里中」

(39) 盧文弨 前揭書 四六〇頁 「君言試前得余所爲亡室桑孺人行略讀之、惻惻然若有動於中、謂能質言之而情事亦曲盡也。君好余文、余好君文、其相合亦自有不偶然者。自後試屢不利、君守其道自若。至三十一年會試、余又與分校之列。揭榜日、唱名至第九」

Perspectives of Luwenchao's Learning

Shinji WAKAMATSU

Division of General Education
Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi
807-8586, Japan

No English abstract